## 一緒に学びたい……医療的ケアの壁

### ⑤ 連携

# 保護者の負担軽減へ模索

夏休みが終盤を迎えた8月下旬の午後。岡山市立豊小学校（同市東区西大寺川口）で行われた校内の教職員向けの研修会で、訪問看護ステーション・シエル（同市中区海吉）の看護師福田貴通さん(40)が切り出した。

「人工呼吸器を怖いと思うかもしれないけど、逆にこれが着いているから安全だと考えてほしい」

4月から同小へ通う脊髄性筋萎縮症の大森泰地君(7)の緊急時の対応を学ぶため、泰地君を3歳の時からケアしてきた福田さんが招かれた。

福田さんは呼吸器の仕組みを説明。装着した人は常に気道が確保されているため、アレルギー反応などで気道が閉塞（へいそく）した場合より緊急時に救命しやすいことなども話した。

「呼吸器に対する見方が変わった」と久保勝彦校長。福田さんは「不安なことがあれば、いつでも相談してほしい」と伝えた。

その言葉には、自分たちのような看護師が学校と連携することで、泰地君に毎日付き添わねばならない保護者の負担を軽くしたいとの思いが込められていた。

■　■

「保護者の付き添いが外れるよう検討はしているが、『いつまでに』とは今は言えない」と岡山市教委指導課の担当者は話す。

課題の一つが、保護者が安心してケアを任せられる看護師の安定的な確保だ。泰地君と同じく人工呼吸器を着けて市立竜之口小（同市中区四御神）に通う足立大和君(10)の場合も看護師が途中で何人か辞め、補充に苦労している。時給を上げて募集しているが、集まりにくい状況が続く。

「その子のケアに慣れた訪問看護師を学校に派遣するのが一番いい」と福田さんは考える。訪問看護ステーションと複数契約すれば人材は確保しやすい。ただ、学校への派遣は医療保険が適用されず、実施すれば全額、自治体の自己負担となる。実現にはまだハードルがある。

独自の施策によって看護師を確保している自治体もある。大阪府箕面市は、医療的ケアが必要な子のために看護師を雇っている学校で一般的な時給のパート職に加え、より給与が高く身分が安定する月給の看護師を採用。ペアで児童をケアする手厚い態勢で、保護者が付き添わずに済むようにしている。

■　■

保護者の負担軽減には、医療機関などの学校に対するバックアップ体制も鍵を握る。

6月に改正された児童福祉法は、自治体に対し、医療的ケアが必要な障害児が適切な支援を受けられるよう保健・医療、教育などの一層の連携を求めた。

岡山県も2011年度以降、小児科医や経験豊かな看護師を特別支援学校に派遣して指導・助言に当たってもらう事業を順次進めている。

民間レベルでも、医療・福祉・教育関係者でつくる「倉敷地区重症児の在宅医療を考える会」は講演会やシンポジウムを重ね、学校での医療的ケアを巡る連携について共に考える機会をつくっている。「学校の看護師がかかりつけ医に随時相談できる態勢づくりも連携の一つの方法」と、同会メンバーでもある「つばさクリニック岡山」（岡山市北区奉還町）の中川ふみ医師(37)は提案する。

保護者が付き添わなくても、医療的ケアが必要な子が通学できるようになってほしい―。大森泰地君の母・美代子さん(45)には、そう願うことが「わがままではないか」との葛藤もある。「多くのお金や人を使わなくても自分が付き添えばいいんじゃないか」と。

それでも、と思う。「今は私たちだけの問題でも、態勢が整い、そこに道ができれば後に人が続く。そしていつか当たり前のことになる」。その日を夢見ることが今の支えだ。

（阿部光希）

豊小の教職員に人工呼吸器を着けた子へのケアを説明する福田さん（右手前）。学校と連携して保護者の負担軽減につなげたいと思っている

---

節会

佳子さまが

マ手
さ

て手話を用い「パフォーマ
ンスが努力の集大成になる

は会場の人たち
両手を振る手話
っていた。
大会には13都
校などの計20チ
場。4月の熊本
災体験を演技し
熊本聾（ろう）学校のチ

---

巨大カボ
重さ日本一

小豆

各地から巨大
を集め、重さを競
一どでカボチャ
日、香川県小豆島
れ、千葉県野田
平川健一さん(54
一さん(45)の2
amK」（チ
が重さ462・
一に輝いた。歴代
重さ。
栽培を始めて

日本一
どでかボチャ
4625